大日本国防婦人会機関誌
『日本婦人』
―「カッポウ着」と銃後・軍事援護 1938 ～ 1942

全10巻
＋別冊

監修・解題―広瀬 玲子
推薦―成田 龍一

1930 年代後半、日本内地最大の女性組織団体になった「大日本国防婦人会」。
軍人とは関係を有しない一般婦人が集まり
軍事支援をはじめた点に広く女性に訴える基礎があった。
逆に軍はこれを銃後の戦争協力や思想統制に利用した。



日中戦争勃発の半年後、「大日本国防婦人会」に機関誌が生まれる。この雑誌は従来、「大日本国防婦人会」を含む軍事扶助六団体の雑誌として、同タイトルで発行されていたが、1938年1月第48号から「大日本国防婦人会」のものとなった。そして「大日本国防婦人会」が「大日本婦人会」へと統合される1942年3月第98号まで続く。

本質は、「『母性愛』を奉仕と犠牲の精神に転化させることによって、挙国一致への心理的基盤を補強」(鹿野政直)したことにある。
発行したメディアを通じて、実態・実相を明らかにする。

推薦文 『日本婦人』から見えてくるもの

成田 龍一
（日本女子大学 名誉教授）

井上ひさしの戯曲『きらめく星座』（初演 1985 年）は、日米開戦の前夜（1940 年 12 月）から、おおよそ一年間の「庶民」生活をえがくが、大日本国防婦人会と思しき会活動に参加する「ふじ」が、登場人物のひとりである。「ふじ」はバケツ体操を披露するなど（井上は、あえて時間をずらして、この場面をもりこんでいる）、戦時の光景には「婦人会」の活動が絶えず付随している。

大日本国防婦人会（以下、国防婦人会と表記）は、大阪国防婦人会として出発した。1932 年 3 月のことで、それを報じた『大阪朝日新聞』（3 月 27 日）は、「台所から街頭へ」「家庭婦人が活躍」との見出しをつけている。おりしも、大正デモクラシーが、前年の「満州事変」を契機に、戦争の時代に入り込む時期である。デモクラシーから戦時体制への転回の現れとして、国防婦人会は、愛国婦人会、大日本連合婦人会とともに、女性たちの動員の拠点となる。

上流の女性が集まり、長い歴史を持ち、内務省の管轄下にある愛国婦人会、国家（文部省）が関与して結成された大日本連合婦人会に対し、国防婦人会は陸軍と関係を有している。そして、なによりも大阪の主婦が主体的、自発的にその始まりを作った点に特徴を有する。その活動の概要は、藤井忠俊『国防婦人会』（岩波書店、1985 年）が、詳細に考察している。

＊　＊

さて、こうした国防婦人会に集った女性たちは、どのような想いを有していたであろうか――この問いは、藤井が明らかにした、「日中戦争の銃後形成史」の一こまとしての国防婦人会の考察をさらに押しすすめる方向性のひとつとなろう。国防婦人会総本部の機関誌である『日本婦人』は、そうした記事に充ちている。一例として、最終号となった『日本婦人』第 98 号（1942 年 3 月）を開いてみると、「想ひ出特輯号」と銘打ち、関係者の「想い出」がこもごも語られている。その「想い出」は、「本部長」「分会長」といった指導者の位置にある女性であることにもよっているが、みな、苦労のなかの満足、充足感を語っている。では、そこに一会員として参加していた女性たちも同様の感慨を有したであろうか。動員するもの―動員されるものとの意識の相違はあるのだろうか。さらには、戦争の展開によって、女性たちの意識は変わってきたのではなかろうか……。機関誌『日本婦人』を読むことによって、そうした問題が、あらたに見えてくる。

そして、こうした「銃後」の心性、その重層性を考察することが、戦争のリアリティを知るうえで重要なこととなろう。主体性と体制への参加、自発性と動員、さらに初発の目的とその推移などを考察しながら、1930 年代の女性たちの経験に学ぶことは、コロナ禍やウクライナ侵攻といったなかで、２１世紀を生きる私たちにとって、示唆される点が多いはずだ。



背景は上から【3 巻】【1 巻】に収録

「大日本国防婦人会」年表

1931 ～ 32 年	満洲・上海事変後、大阪市港区居住の無名の女性―安田せい・三谷英子の自発的な軍事援護活動（出征兵士に湯茶の接待・見送り等）が活動の原点
1932 年 3 月	満洲国建国。「大阪国防婦人会」発会、会員 40 人
1932 年 10 月	「大阪国防婦人会」、陸軍支援を得、全国組織「大日本国防婦人会」として東京で発会
1933 年	会員 4,000 人、カッポウ着で観兵式初参加。芸妓 1,000 人今里新地分会結成
1934 年	この頃、水害・防空・資源の三テーマの新たな総動員演習創出、組織全国的に。会員数 100 万人突破
1935 年	会員数「愛国婦人会」を上回り、各地で愛婦との対立
1936 年	軍部からの組織化、地方で飛躍的拡大
1937 年	日中戦争後、出征・葬儀取仕切に参加、町村に定着。会員数倍増 684 万
1938 年	会員一層急増、見送りの様相も、通過地点から各町村駅の原点見送りに。満洲国防婦人会発会
1939 年	「進め精動」のかけ声で国防思想普及の担い手に
1940 年	「大日本国防婦人会」会員数 900 万人、内務省系「愛国婦人会」、文部省系「大日本連合婦人会」を超え、最大女性組織団体に。婦人団体統合問題再燃
1941 年	興亜奉公日、「国婦」は「おしろいなし日」と決定
1942 年	会員 1,000 万人「大日本国防婦人会」は、「大日本婦人会」へ発展的解消のため解散。「愛国婦人会」・「大日本連合婦人会」も統合。
1945 年	「大日本婦人会」解散



3巻

る け 於 に 鮮 朝

て就に旨趣の會人婦防國

部 本 山 龍

はしがき

國防婦人會の趣旨は、内地も朝鮮も別に變りはないが、特に朝鮮は於ては、多數の婦鮮婦人に對してこの趣旨に基き實行せしむる臨に於て、自然に特異點を有するものであつて、又本會により内鮮一體の實をあぐる上に於て非常なる効果をもたらすものである事に留意し、内鮮人共に

民族意識を持つことなく、眞に婦人國防の大義に向つて邁進する樣指導者も會員も共に努力し、以て國防の礎たることは勿論、内鮮婦人一體となり、日本婦徳を修養し、東洋平和の聖業に向つて貢獻すべきものであります。

本會の起源と沿革について

創設に就て――滿洲事變の際大阪歩兵第三十七聯隊附中尉井上清氏が出征の命を受けました時、令夫人樣は夫を勵ましその後顧の憂ひを除く爲目覺して相集つたのであります。その夫人の叔母にあたる安田せい樣が經の死を天死にさせぬ樣にその精神を繼承せんとて、出征部隊の大阪驛通過並に大阪驛港輸等に際しては、常に之を見送り、且つ諸般の手傳をなしつゝある間に於て同志相集まり遂に「會を作つては如何」との發議となつて創設せられたものであります。

儀式に就て――本會發立の趣旨は、銃後の後援と、婦徳の修養にありまして、これを實行する事により、婦人國防の大義を完うしようといふのであります。

制服に就て――制服は白い割烹着に「大日本國防婦人會」と記せる白襷を掛ける事に定められて居るのであります。白の割烹着を附けたるは、婦人職務の精神を發揮するもので、これに白襷を掛けて崇高なる精神の發揚を表徴するに良い服裝であります。白襷、白割

10巻

野戰病院

前線のおばさん部隊

（繪と文）・松下紀久雄



1巻

本誌の使命に就て

――機關誌發刊のことば――

大日本國防婦人會總本部

事變下事繁きうちに、郷かしき昭和十三年の新春を迎へ、茲に六百五十萬會員と共に、謹んで聖壽の無窮を祈念し奉り、併せて皇國の洋々たる前途を祝福するは、誠に慶賀に堪へぬところであります。

顧みますると、わが國が斷乎暴支膺懲の聖師を進めてより既に半歳、北支に江南に收めたる輝々たる戰果は、早くも新政權の確立となつて表はれ、東亞の和平を醸成しつゝある大第であります。然しながら抗日の迷夢未ださめぬ隣邦政府は、自らを壞滅の淵に投じつゝも、なほ執拗なる赤魔の魔手にしての使命の重大なる責務を双肩に擔ふことゝなつたのであります。

從つて此際、私達大日本國防婦人會員も、徒らに戰捷に醉ふことなく、擧國の礎石となつた幾多の英靈の冥福を祈るを忘れず、全會員協力一心、一層の緊張の下に、重且つ大なる婦人護國の大義實踐に邁進し、皇國一段の隆榮に寄與致さなければならないと存じます。

此の秋に當り、從來、本會を始めとして社團法人帝國軍人後援

「大日本国防婦人会」の活動……

1. 慰問袋作製募集送付
2. 出征凱旋部隊・艦隊兵の送迎接待、慰安会の開催、慰問品の寄贈
3. 戦死者遺骨弔意・葬儀参列・香奠供物の寄贈・墓地の清掃
4. 出征家族・戦死者遺家族の調査並慰問救恤及就職の斡旋
5. 傷病兵の慰問・入院患者慰問・見舞品の寄贈



「カッポウ着」……

従来の婦人団体は、和服に紋付黒羽織という「よそ行き着」で集まり、会場は着飾った婦人たちのサロンの様相を呈していた。立派な衣装を持っている奥様がたが集まる敷居の高いものと庶民女性の目には映っていた。この常識を「大日本国防婦人会」の「カッポウ着」は打ち破った。「カッポウ着」一枚あれば参加できる大衆的・庶民的女性団体の誕生であった。軍部によって統制された団体とはいえ、「カッポウ着」には女性の気持ちが反映されており、「大日本国防婦人会」の大衆性・庶民性をあらわす表象となった。

豊富な写真グラビア・絵（漫画）欄……

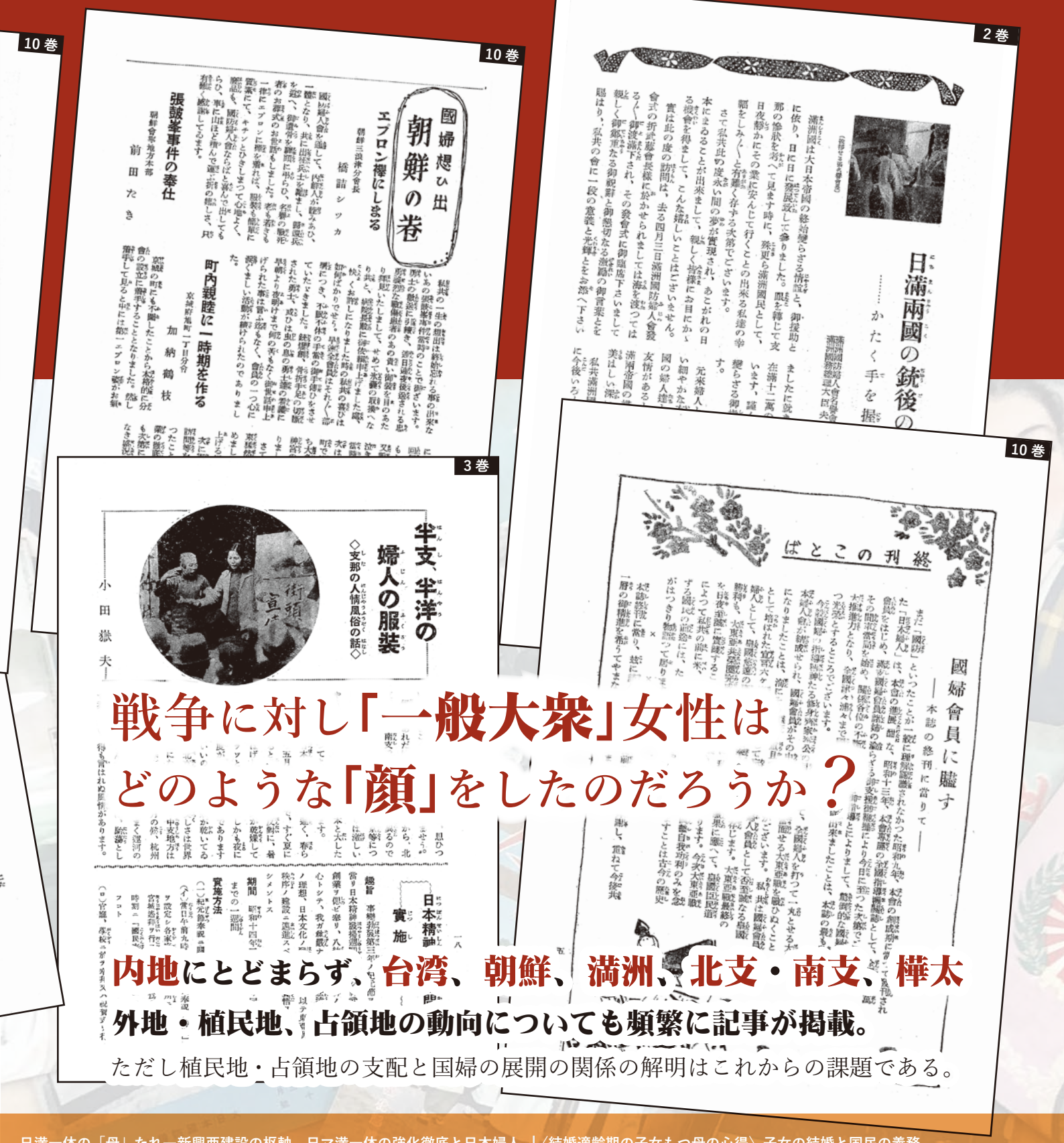
外地・植民地における前線の様子・会員活動状況を掲載、ニュースを絵入りで解説。

「読者の声」欄……

活動に参加した会員の生の声が掲載。
女性の「自発性」を見て取れる。

総目次（抄録）

満洲国銃後のまもり―満州国防婦人会発会式便り（口絵）
協和の光家庭より―「満州国防婦人会」の結成されるまで
〈われ等は海の子〉 こころとわざをみがく海洋少年園児たち　天ケ瀬 行雄（大日本海軍少年団主事海軍主計大尉）
女の髪綱　岡本 かの子
事変と軍用犬　坂本 健吉（社団法人帝国軍用犬協会副会長／陸軍少将）
日満両国の銃後の力たらん―かたく手を握って誓う　張徐芷卿（満州国防婦人会名誉会長／満州国務総理大臣夫人）
個人間の信用を重んずる国民―支那の人情・風俗の話 小田 嶽夫
樺太の国婦を語る　鮎貝 ひで
〈銃後に綴る〉傷痍の勇士を慰問して　鈴木 久（東京本部日本橋第六分会長）
〈銃後に綴る〉境内清掃に奉仕して　岡本 ヒサ（朝鮮新義州櫻町分会長）
〈銃後に綴る〉自給自足、遺族をまもる　伊藤 リソ（延岡支部（宮崎）伊形分会副分会長）
国防パンツの裁ち方と作り方（寄稿）　杉原 八十路（東京本部目黒駒場分会員）
日支親善の青島　宗像 節子（青島支部）
〈支那事変国防献金美談集〉学校生徒児童の部
朝鮮に於ける国婦の趣旨龍山本部
北京に於ける国婦
〈ロシヤの人情風俗の話〉哀れむべき浪費癖　竹尾 弋
この姿を見よ！　大久保 弘一（陸軍省情報部歩兵中佐）
〈国婦文苑〉皇紀 2600 年宮崎神宮神域拡張工事奉斎作業を終えて　谷村 サヤ（宮崎氏大宮分会長）
〈国婦文苑〉やまとなでしこ―出征軍人へ慰問誌を贈って　由良 美津榮（兵庫県水上郡春日部分会長）
〈地方本部だより〉各力の慰問興行―川崎支部だより／三遠本部第二回大会／幹部会開催の状況―鹿児島地方本部だより／皇祖大廟並神社仏閣参拝／北葛支部―奈良本部管内結成総会／出征遺家族、傷兵慰安会―朝鮮国婦だより／第一線将兵と労苦を共に―中支安慶支部だより／大陸最前線に国婦
〈白エプロン〉遺家族慰安会　高橋 澄（北海道紋別郡白瀧分会）
〈白エプロン〉マッチ空箱更生の提唱　板垣 こと（新潟県中蒲原郡村松町分会）
〈読者文芸〉霞ヶ浦航空隊見学旅行の記　神澤 婦美子（埼玉県加須支部長）
満州国防婦人会の全貌　張徐 芷卿（満州国防婦人会会長）
〈援護ニュース〉帰郷傷病勇士に健康診断網／期間後の死歿勇士遺族を援護／籍に入っていない遺族に准扶助料支給
内鮮の同化と国婦の使命　鈴木 庫三（陸軍省情報部陸軍輜重兵少佐）



戦争に対し「一般大衆」女性はどのような「顔」をしたのだろうか？

ただし植民地・占領地の支配と国婦の展開の関係の解明はこれからの課題である。

日満一体の「母」たれ—新興亜建設の枢軸、日マ満一体の強化徹底と日本婦人の使命 竹下 加奈女（満州帝国協和会東京事務所嘱託）
日支婦人会親善の心構へ 生田 花世
修養のしをり—八紘一宇の大精神 浅野 利三郎（日本大学教授）
国防と女性　支那篇 大内 俊（陸軍省情報部陸軍省嘱託）
招魂の夜—靖国神社合祀祭に参列して 成島 鶴子（故陸軍歩兵大佐成島栄台妻東京府軍人遥家族家庭訪問事務嘱託）
（在米人からの熱誠こもる慰問袋に戦友と感涙に咽ぶ）広東の復興ぶり 吉井 功
朝鮮国防婦人会の状況 谷 實夫（大日本国防婦人会常務理事／陸軍少将）
広義国防と婦人 東條 英機（陸軍大臣）
前線将兵の労苦と銃後国民の奉公 本庄 繁（軍事保護員総裁陸軍大将／男爵）
報国債権／貯蓄債権の抽選はかうして行はれる（口絵）
第一線将兵へおくれまごころ—恤兵について 浅沼 吉太郎（陸軍恤兵部員／陸軍中佐）
国民食の作り方 香川 綾（女子栄養学園主）
第八路軍の娘　第三回 上田 廣　無縁寺 心澄（画）
輝く明日の建設へ—満州行脚断想 大瀬 菊（大日本国防婦人会理事）
〈結婚適齢期の子女もつ母の心得〉子女の結婚と国民の義務 田中 孝子（東京市結婚相談所長）
〈結婚適齢期の子女もつ母の心得〉非常時下青年男女の結婚理想 木村 よしの（東京市結婚相談所伊勢丹出張所内）
科学兵器のねだんは？
〈私の職域奉公〉産業戦士の覚悟 湧井 ハル（日清紡積西新井工場分会）
前線のおばさん部隊 松下 紀久雄（絵と文）
決戦態勢下の婦道実践 和知 雅子（大日本国防婦人会台湾本部長）
〈国富の感激を語る—この苦心・この感激〉嬉しい想ひ出 松本 時子（朝鮮京城支部大新分会）
〈国婦想ひ出—東部の巻〉満鮮の印象 齊藤 勝子（新潟地方本部副本部長）
〈国婦想ひ出—中部の巻〉満鮮に仰ぐ日章旗 泉谷 花子（岡山県小川郡支部理事）
〈国婦想ひ出—朝鮮の巻〉張詵峯事件の奉仕 前田 たき（朝鮮海寧地方本部）
〈国婦想ひ出—朝鮮の巻〉町内親睦に一時期を作る 加納 鶴枝（京城府旭町一丁目分会）
〈国婦おもひで—台湾の巻〉偉大な白襷教育 有福 光子（台湾本部教化分会）
〈国婦おもひで—台湾の巻〉真心の送迎 小野 菊子（台湾新竹市副分会長）□

大日本国防婦人会機関誌
『日本婦人』
—「カッポウ着」と銃後・軍事援護
1938 ～ 1942

監修・解題—**広瀬 玲子**　　推　薦—**成田 龍一**

資料提供—**愛知大学 豊橋図書館、**
滋賀県立男女共同参画センター、
東京大学大学院法学政治学研究科附属
近代日本法政史料センター(明治新聞雑誌文庫)、

造　　本—A5・並製・総約3,300頁
揃　　価—168,000円（配本毎・別冊分売可）

【第一回配本】2022年10月　配本揃価33,000円　ISBN978-4-910363-85-1

- **第一巻**（324 頁）　15,500 円
  『日本婦人—大日本国防婦人会機関誌』48 号～ 53 号
  （日本婦人編纂部、1938 年 1 月～ 6 月）
- **第二巻**（344 頁）　16,000 円
  『日本婦人—大日本国防婦人会機関誌』54 号～ 59 号
  （同上、1938 年 7 月～ 1939 年 12 月）
- **別　冊**（約 74 頁）1,500 円（別冊のみ分売可）ISBN978-4-910363-89-9
  ＊解題、総目次細目、索引、発行年月一覧表

【第二回配本】2023年4月　配本揃価36,000円　ISBN978-4-910363-86-8

- **第三巻**（336 頁）18,000 円
  『日本婦人—大日本國防婦人會機關誌』
  60 号～ 62 号（日本婦人編纂部、1939 年 1 月～ 3 月）
  63 号～ 64 号（大日本国防婦人会総本部、1939 年 4 月～ 5 月）
- **第四巻**（340 頁）18,000 円
  『日本婦人—大日本國防婦人會機關誌』
  65 号～ 69 号（同上、1939 年 6 月～ 10 月）

【第三回配本】2023年10月　配本揃価49,000円　ISBN978-4-910363-87-5

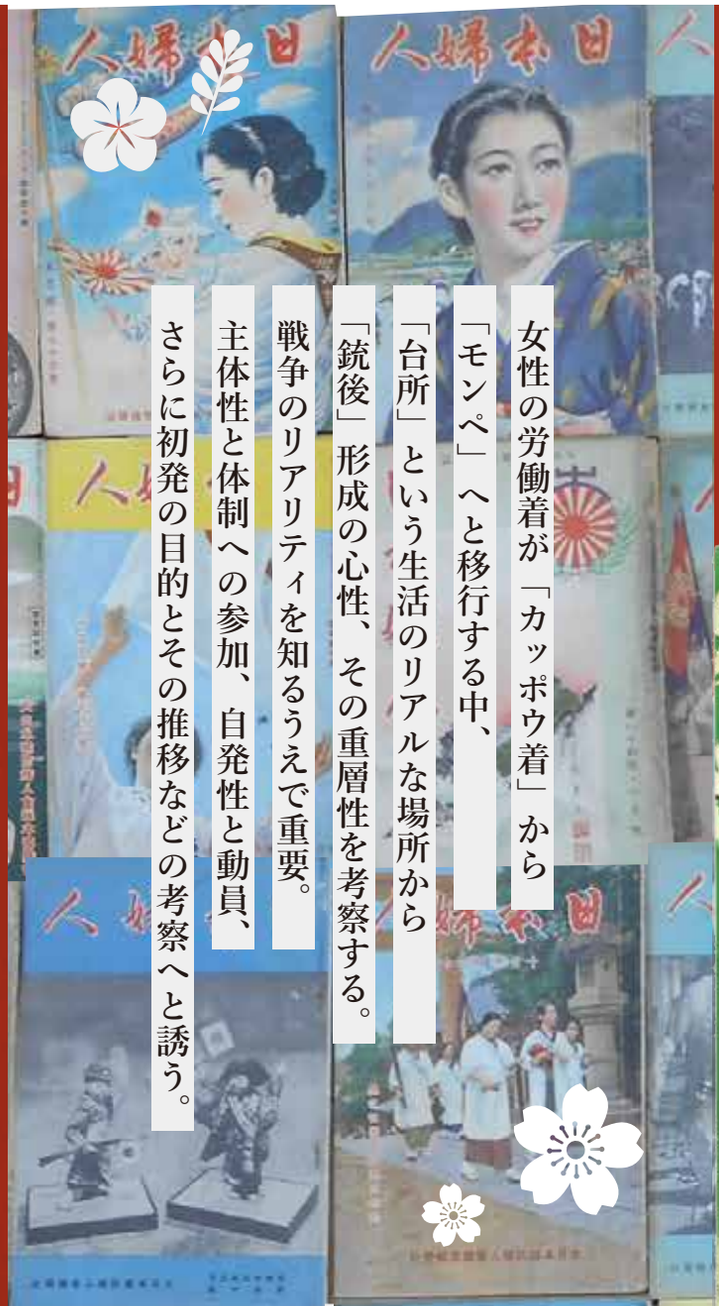
- **第五巻**（322 頁）18,000 円
  『日本婦人—大日本國防婦人會機關誌』（大日本国防婦人会総本部）
  70 号～ 74 号（1939 年 11 月～ 40 年 3 月）
- **第六巻**（312 頁）15,000 円
  『日本婦人—大日本國防婦人會機關誌』（同上）
  75 号～ 78 号（1940 年 4 月～ 7 月）
- **第七巻**（318 頁）16,000 円
  『日本婦人—大日本國防婦人會機關誌』（同上）
  79 号～ 83 号（1940 年 8 月～ 12 月）

【第四回配本】2024年4月　配本揃価50,000円　ISBN978-4-910363-88-2

- **第八巻**（350 頁）19,000 円
  『日本婦人—大日本國防婦人會機關誌』（大日本国防婦人会総本部）
  84 号～ 88 号（1941 年 1 月～ 5 月）
- **第九巻**（268 頁）15,000 円
  『日本婦人—大日本國防婦人會機關誌』（同上）
  89 号～ 92 号（1941 年 6 月～ 9 月）
- **第十巻**（296 頁）16,000 円
  『日本婦人—大日本國防婦人會機關誌』（同上）
  93 号～ 98 号（1941 年 10 月～ 42 年 3 月）

Kanazawa Bumpokaku
金沢文圃閣
〒920-0867 金沢市長土塀2-16-30
Tel 076-261-8884　Fax 233-3111

□書店様へ…ありがとうございます
直接小閣までお申し込みください



女性の労働着が「カッポウ着」から「モンペ」へと移行する中、「台所」という生活のリアルな場所から「銃後」形成の心性、その重層性を考察する。戦争のリアリティを知るうえで重要。主体性と体制への参加、自発性と動員、さらに初発の目的とその推移などの考察へと誘う。

類縁書のご案内



西原和海 監修・解題
『女性満洲』　完結
—「全満唯一の女性文化雑誌」
【全 8 巻＋別冊】

B5 判　糸上製函／A5 判　並製（別冊のみ）　総 2,616 頁
￥184,000　2018 ～ 20 年刊【復刻版】

1942 年創刊号～満洲発行の雑誌としてはきわめて残存率が低いとされる 1945 年 7 月の第 41 号までを収録。植民地支配とジェンダーの複雑なありように接近する 34 冊分。特に 41 号は満洲の出版状況の最末期を語るものとしても第一級の歴史資料。池川玲子／成田龍一—推薦

※本書は、『日本婦人〔1942 ～ 45 年・大日本婦人会発行〕』復刻版（不二出版、2011）と同名異タイトルであるが、 両タイトルの活用により戦争と女性の態様が一層解明可能となるだろう。
※本パンフレット作成に当たり本書解題などを参照した。